

音源の比較試聴(17)

—リストのピアノ協奏曲 1 番—

1. 始めに

前報(16)に引き続き、各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の対策の効果の確認のため、各種音源の比較試聴を実施します。

2. 音源の比較試聴の試聴方法と音源

各種音源の再生経路に関するアースアキュライザーを含む種々の再構成はアースアキュライザーの活用(6)で述べたとおりで、さらに対策を追加しています。今回もそれらの対策の効果をも、音源を替えて総合的に確認していきます。

音源は、下記の音源のフランツ・リストのピアノ協奏曲 1 番を聴いていきます。

アナログ盤

ドイツグラモフォン MG 1039

ラザール・ベルマン(ピアノ)

カルロ・マリア・ジュリーニ指揮ウィーン交響楽団

DVD

ビクターエンターテイメント VIBC-9

フジコ・ヘミングウェイ(ピアノ)

ヘイコ・マティアス・フォルシュター指揮ミュンヘン交響楽団

STAGE+

ダニエル・バレンボイム(ピアノ)

ピエール・ブーレーズ指揮シュターツカペレ・ベルリン

クリスチャン・ツイメルマン(ピアノ)

小澤征爾指揮ボストン交響楽団,

マルタ・アルゲリッチ(ピアノ)

クラウディオ・アバド指揮ロンドン交響楽団

ベルリンフィルデジタルコンサートホール

エフゲニー・キーシン(ピアノ)

マリス・ヤンソンス指揮ベルリンフィル

ボリス・ベレゾフスキー(ピアノ)

トゥガン・ソヒエフ指揮ベルリンフィル

3. 音源の比較試聴の試聴結果

アナログ盤のベルマンとジュリーニ指揮ウィーン交響楽団は、1976年の録音で、ベ

ルマンの切れのよい華やかなピアノがジュリーニ指揮ウィーン交響楽団の中低域の厚みのある、落ち着いた美しい演奏から浮き出しています。

DVD のフジコ・ヘミングウェイとフォルシュター指揮ミュンヘン交響楽団は、2000年の収録で、きらきらと華やかな演奏で、ピアノもオーケストラもクリアな音です。

STAGE+のバレンボイムとブーレーズ指揮シュターツカペレ・ベルリンは、ピアノは中庸で丸まった音で、シュターツカペレ・ベルリンも重厚で厚みのある演奏です。

STAGE+のツィメルマンと小澤征爾指揮ボストン交響楽団は、なんと言ってもツィメルマンの鋭角的な打鍵とダイナミックな演奏が特徴的で、ボストン交響楽団も響きが豊かです。

STAGE+のアルゲリッチとアバド指揮ロンドン交響楽団は、若いアルゲリッチとアバドのコンビで、爆発的とも言えるダイナミックで情熱的な演奏です。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのキーシンとヤンソンス指揮ベルリンフィルは、2019年の収録で、しばしばリファレンスとして試聴していますが、キーシンの弾くスタンウェイの左手の低音の沈み込みがホールに響き渡るところがリアルです。

ベルリンフィルデジタルコンサートホールのベレゾフスキーとソヒエフ指揮ベルリンフィルは、2012年の収録で、音は先のキーシンとヤンソンス指揮ベルリンフィルに似ていますが、演奏はややアップテンポで軽快に展開します。

上記のように、多彩な演奏を聴いてみましたが、随分と演奏スタイルが多様であり、多彩な表現が展開されることが分りました。

4. まとめ

いずれをとっても、アースアキュライザーの投入とそれに伴うアースラインの再構成、さらにはAV ドーナッツなどの結果、すべて効果がそれなりに現れ、演奏の違いや収録年代の違いも把握でき、格落ちするような音源のフォーマットや再生経路はなくなったことが確認できました。

以上